Views from Orienteering

村越 真

View71: 森を走ろう

1月11日、東京の品川にある東京海洋大学で日本トレイルランナーズ協議会による「森を走ろう2016」が開催された。この分野の動きに興味ある人は「あれ？」と思ったのではないだろうか。「森を走ろう20**は確かJOAが主催していたはず。」そう、昨年までの4年間、同名のシンポジウムがJOA主催で行われてきた。他の活動者とのコンフリクト、自然保護関係者からの糾弾、かつては同じような境遇に置かれたスポーツとして、あるいはこうした社会的圧力の余波を受けかねないスポーツとして取り組んできたのが、「森を走ろう」だった。

昨年秋、トレイルランニングに全国組織に向けた動きがあった。これが日本トレイルランナーズ協会（JTRA）だった。その代表者にJOA会長でもある山西哲郎さん、副代表の一人に村越が就任したことで、このシンポジウムがJTRAに引き継がれた。

そうなって気づいたことがいろいろある。その１、トレイルランニングには大きな集客力があるということ。これまでの森を走ろうでは、最高でも100名そこそこの参加者だったが、今回あっさり200人の参加を越えた。本格的な広報だってせいぜい12月半ばであることを考えれば、如何にトレイルランニング自体に魅力を感じる人が多いかが分かる。

その２、やっぱりオリエンテーリング愛好者は「まじめ」だということ。もっと正確に言えば、山西先生と私たちオリエンテーリング愛好者、というべきかもしれない。これまでの、いかにも学会然としたスタイルやテーマから、より親しみやすいスタイルになった。どちらがいいということはないが、同じことを伝えるにしても、どうすれば興味を持ってもらえるか、親しみやすい入り口になるかは、オリエンテーリングがもっと参考にしていい部分だと感じた。

全体として感じたのは、オリエンテーリングが競技を極めたが故にディープになりすぎ、多様性を失いつつあることだ。生物界でもある環境に対して適応が進みすぎた生物は環境の変化に脆弱になることがあるという。恐竜の絶滅とほ乳類の台頭も、前者が急激な環境変化についていけなかったからと言われている。競技の先端は当然現在ある競技環境への高度な適応になるにしても、変化する現代における普及・発展には多様な人材と考え方が必要なのだと、感じた。

トレラン界の顔、鏑木さん、石川さんをはじめ、錚々たるメンバーがシンポジウムを盛り上げた

分科会の一つ「魅力とリスクは紙一重」トレイルランニングの安全を考える分科会。自然の中での安全確保はオリエンテーリングにも共通した課題だ

View72: PTAでロゲイニング

１月は二つのロゲイニングを平行して準備していた。その第一弾23日は、勤務校のオープンスクールのためのロゲイニングだ。普段学校に来にくいお父さんのために、土曜日に設定し、学校を見てもらおう。でも学校を見るだけでは人を呼びにくい。そこで僕の方から「学校の周囲をロゲイニング形式で、親子で回るイベントを併設してはどうか？」と提案したところ、それが受け入られたのだ。全校児童の1/6にあたる約100名、保護者を入れると250人の参加を得た。

準備するにあたって意識したことがいくつかある。我が校は江戸時代以前からの今川館跡である駿府城の中にある。周囲には細やかだが今川時代や江戸時代に遡る旧跡が多数ある。これらを親子でみてもらい、駿府の歴史を自らの脚で知ってもらいたいということ。二つ目は、学区制のない本校で、保護者や学校の周りのことをあまり知らない。児童と一緒に歩いてもらうことで、「通学路のここが危ないね。こんなことに注意すればその危険が回避できるね。」あるいは「もしここで地震になったら、どうする？」なんていう問答を親子で意識してもらうということ。たった60分のロゲイニングだったが、一般の人にはちょうどよかったようだ。天候にも恵まれ、子どもたち、保護者ともに楽しんでもらえた。

このイベントにはいくつかのおまけがある。その１、フェースブックにこのイベントのことを書いたら、清水区にある小学校のPTA会長をしているというトレイルランナーから、視察したいのだが、いいか？という問い合わせが来たこと。彼はばりばりの格好で参加し、「ぜひ自分の学校でもやりたい」と言って帰っていった。学区のある公立学校でも、児童・保護者、双方が学区のことをよく知っている訳ではない。ロゲイニングあるいはスコア形式のオリエンテーリングは、小学校区程度の場所をよりよく知る、非常によい手法だった。特に地震や犯罪、交通事故などのリスクへの関心が高くなっている現在、それらを実地で親子揃って考えてもらう活動は、学校としてもPTAとしても受け入れやすいだろう。

その２、日本教育新聞という教育関係者向けの週間新聞があるのだが、旧知の記者にこのイベントの話を寒中見舞いに書いたら、即反応があったこと。どこのPTAもその運営には苦心している。こうした楽しみながら子どもの実利にもつながるイベントはきっと関心を集めるだろうということだった。そういえば、10年以上前から、調布では学区にある子ども110番の家を巡るスコア０をやっている。子ども110番はボランティアの家庭に、子どもに対する犯罪のダメージコントロールとして全国に普及している制度で、学区内にいざというとき子どもが逃げ込める家となってもらうという制度だ。発想は悪くないが、子どもが110番の家を知っているのか、知らない家に緊急時に逃げ込めるのか、という懸念がある。スコア０形式であらかじめ訪れておけ

ば、いざというときも逃げ込みやすいだろう。ボランティアを名乗り出るくらいの家だから、こうしたイベントにも協力的で、当日はお菓子を用意して子どもの訪問を待ってくれる家もあるという。こちらの方は、「地図中心」という地図センターの月刊誌に紹介しておいた。

駿府城の周りを、親子で楽しむ

学年ごとに表彰。最高点をとった３年生の親子は 10km 近くを走ってゴール

View73：ハンドベアリングコンパス

研究上の理由で南極観測隊の乗鞍での冬期訓練に参加した。その年の 11 月に出発する南極観測隊が初めて全員集合する訓練で、第一次隊から乗鞍で行われている。必ずしもフィールドに強い隊員だけではなくなった現在では、厳しいというほどの訓練ではないが、それでも雪の中での活動が初めての隊員には「昭和基地よりもつらかった」という印象を残すには十分である。夜は雪中でのツェルト（簡易テント）を使ってのビバーク訓練もある。

この訓練の二日目がルート工作という内容だった。南極では海氷や氷床上を昭和基地から遠く離れて研究活動に出かけることがある。海氷は夏になると薄くなったり、厚い場所でも、海流によってクラック（割れ目）ができたりする。また氷床は大陸から流れ落ちる場所では、クレバス（割れ目）帯ができる。クラックにしろクレバスにしろ落ちたら致命的である。だから、安全性がある程度確保したルートを作り、そこに旗を立ててルートの印にして、それ以後はそのルートを通るようにする。これがルート工作である。

もちろん早春の乗鞍に致命的なクレバスクラックはない。だが、小川ややぶがあって、まっすぐは通れない。そんな環境の中を指定された目標地点に向かって直進したり、合理的に迂回するのがルート工作訓練の内容である。

GPS で現在地が分かる現代でも、ルート工作は写真のハンドベアリングコンパスが利用される。これは GPS には故障もあるし、電池切れもある、「最後にはアナログ技術が強いので、その技術の伝承を途絶えさせないため」という側面もあるが、同時に安易に迂回したりショートカットして進むことは、クラックやクレバスへの転落を誘発しかねない。安全性が確認された直進路以外に進めないハンドベアリングコンパスによるルート移動は、その制約故に、安全なのだという。

やぶや斜面のあるエリアでは、さすがに距離はかなりずれるが、ハンドベアリングコンパスを使うと直進の精度はかなり高くなる。私がついた班は、進路から 60 度そらせる正三角形の迂回法を使ってもなおかつ 200-500m 離れたポイントにぴったり直進できていた。これなら 500m 置きに旗を立てるルート上でも全く問題ないだろう。

余談だが、訓練場所を示す地図の端に「no mapping」とあった。「へー、一般的にも未調査のエリアを no mapping と表現するんだ」と思った瞬間、その地図が O-cad によって作図されたことを悟った。集落の表現が見慣れたオリーブハッチだったのだ。この地図はオリエンティアであり極地研究所の職員であったＩさんによって作られたようだ。Ｉさんは南極でもオリエンテーリングを実施している。昭和基地より南ではほとんど地形がないから、このオリエンテーリング、世界の一番南で行われたオリエンテーリングかもしれない。

（村越 真）

ハンドベアリングコンパスでルート工作をする観測隊候補者たち